**横手の送り盆まつり**

横手の送り盆まつりは、300年以上前から8月15日と16日に行われている、故人を偲び、故人と交わるためのお祭りである。祭りに先立って行われる「ねむり流し」では、地元の子供たちがロウソクで飾られたワラ舟を横手川に運び、川原では太鼓を打ち鳴らし、灯篭を流す。この行事は、夏の暑さで眠くなると悪霊に襲われるので、その眠気（ねむり）を払うために行われた「流し」が起源とされている。8月15日には町民が集まって盆踊りを行い、16日には重さ800kgもある大きな萱引きの屋形船を川に流して死者の霊を弔う「屋形船送り」が行われる。

**お盆の歴史**

日本全国で行われている夏の祭典「お盆」は、仏教の法要が起源とされている。横手の送り盆まつりは、江戸時代（1603-1867）に横手の柳町の住民が主催した追悼行事が始まりである。この時代、日本は3度の大飢饉に見舞われ、食糧不足、米価の高騰、そして何千人もの人々が命を落とした。柳町の人々は、この飢饉で失われた多くの人々を偲び、横手川に藁舟を浮かべた。その後、柳町以外の地域でも船が作られるようになり、現在では屋形船の「繰り出し」という形で受け継がれている。この屋形船は、「ねむり流し」の際に子供用の小舟と同じ場所に並べられ、僧侶による「御霊送り」が行われる。今では船を川に流すことはないが、「ねむり流し」で放たれる小提灯の灯りは、江戸時代の風習を彷彿させる。

**舟こぎの儀式（ぶっつけあい）**

祭りに参加する屋形船は、横手の各地区の住民や商店主が準備する。舟の骨組みは前回の祭りで使ったものを再利用するが、船体や金具は毎年新たに作る必要があり、その作業には1カ月ほどかかる。参加町内がそれぞれ屋形船を作り、その屋形船を町内から横手川の河川敷まで運ばれなければならない。8月15日の盆踊りでは、観光客が間近で見られるように船が並べられる。16日には舟を川に下ろして「送り火」を行う。続いて、送り盆まつりのハイライトである「屋形船のぶつけあい」が行われる。舟は橋の上に戻り、2隻ずつ向き合い、舟のへ先を持ち上げぶつけあいを繰り広げる。各地区の代表者が船に乗り込み、声を張り上げて手を振り、頭上では花火が打ち上げられる。